

平成 27 年度 修士論文

岐阜県中津川市加子母における歌舞伎保存会の運営システムに関する研究

A Research on the Operation System of Kabuki Preservation Society in Kashimo, Gifu Prefecture

指導教員

名古屋工業大学 社会工学専攻

藤岡伸子 教授

工学研究科 社会工学専攻 人間空間分野

平成 26 年度入学 26418525

藏野洋美

2016 年 2 月 1 日 提出

目次

第1章 序論	01
1.1 研究の背景と目的	02
1.2 既往研究	04
1.3 研究の流れ	05
1.4 本論文の構成	06
1.5 第1章註	07
第2章 加子母歌舞伎の歴史と現況	09
2.1 加子母地域の概要	11
2.2 関連用語について	13
2.2.1 それぞれの用語の使用例	13
2.2.2 本論文における定義	15
2.3 第一期：創始期（～1943年）	16
2.3.1 地芝居の発生	16
2.3.2 舞台の変化	17
2.3.3 加子母内の農村舞台と地芝居	18
2.4 第二期：停滞期（1944～1969年）	20
2.4.1 第二次世界大戦前後	20
2.4.2 高度経済成長期	20
2.5 第三期：再興期（1970年～）	22
2.5.1 加子母歌舞伎愛好会の成立	22
2.5.2 歌舞伎保存会の歩み	22
2.6 小結	24
2.7 第2章註	25

目次

第3章 歌舞伎保存会の運営システム	28
3.1 歌舞伎保存会の系譜	30
3.2 歌舞伎保存会の組織	39
3.2.1 1995（平成7）年以前	39
3.2.2 1995（平成7）年～2010（平成22）年	39
3.2.3 2011（平成23年）以降	39
3.3 関連組織	40
3.3.1 団升一門	40
3.3.2 衣裳屋	44
3.3.3 東濃歌舞伎保存会	45
3.3.4 岐阜県地歌舞伎保存振興協議会	46
3.3.5 武蔵野美術大学	47
3.4 外部団体との関係	48
3.5 歌舞伎の構成員	49
3.5.1 舞台上の役職	49
3.5.2 準備段階の役職	50
3.6 歌舞伎の運営方法	51
3.7 第3章註	52
第4章 歌舞伎関係者の意識調査	53
4.1 調査の目的	55
4.2 調査の方法	55
4.2.1 調査概要	55
4.2.2 調査項目	56
4.3 調査結果	57
4.3.1 基本属性	57
4.3.2 歌舞伎に関する質問	58
4.3.3 明治座に関する質問	64
4.4 小結	65
4.5 第4章註	67

目次

第5章 結論	68
5.1 総括	69
5.2 今後の課題と展望	70

謝辞

参考文献

資料編

第1章 序論

1.1 研究の背景と目的

1950年代なかばから始まった高度経済成長期において、人々は戦後始めて物質的な豊かさを享受した。食糧難が解消されて人口が増えたため、住宅を作るために政府は拡大造林政策をとり、山には多くの針葉樹が植えられた。また、道路や鉄道のインフラが整備され、都市の過密と農村の過疎がますます加速した。これらの開発は全国の地域で同じ水準を目指すものであったため、あらゆる町が均質化、画一化されていった。

しかし、1960年代後半から公害問題への訴訟が相次ぎ、日本経済の成長には歯止めがかかる。1972年にはローマ・クラブ¹によって『成長の限界』²が発表され、翌年には第一次オイルショックが起こって、高度経済成長期は終わりを告げた。

こうして1980年前後に、人々の関心は物質的な豊かさから、さらに一步進んだものへと移る。1978年の内閣府の国民生活に関する世論調査では、「心の豊かさ」を求める人が「物の豊かさ」を求める人の割合を初めて上回り、以降「心の豊かさ」を求める人が増加の一途をたどっている³。

まちづくりの分野でも、それまでの大規模開発とは異なるものが求められはじめた。成長の過程で忘れられるようになった地域の伝統や歴史を重視するようになり、それらを観光に活かそうとする取り組みが発生した。

岐阜県の東濃地方⁴は、農村舞台という文化資源が多く残る地域である。この地域では、高度経済成長期が終わる1970年代から、毎年それぞれの舞台で地域住民による歌舞伎が行われている。

中でも中津川市加子母の劇場型農村舞台「明治座」は、1894年の建設から今日に至るまで、ほぼ創建当時の姿で残ってきた。さらに、他の舞台と違って常時開館されており、2015年の大改修では、住民の意向により屋根を創建当時の板葺きに復原された。それは、1973年から始まった加子母歌舞伎が毎年かかさず上演されており、住民たちが明治座へ強い関心を抱いているからであると推測される。

本研究では、加子母歌舞伎の運営システムを調査することによって、明治座が今日まで形を変えずに保存・活用されてきた理由を探る。そして、明治座と

加子母歌舞伎を次の世代へ残していくための手がかりを確認することを目的とする。

1.2 既往研究

CiNii Articles（国立情報学研究所論文情報ナビゲータ <http://ci.nii.ac.jp/>）から、加子母や付近の地域の歌舞伎保存会に関する論文を抽出し、検討した。以下、既往研究となりうる2件について述べる。

東濃歌舞伎保存会⁵については、丸山幸太郎が「美濃・飛騨における地芝居保存会の系譜1」（『岐阜女子大学地域文化研究 25』, 13-28, 2008）において、その成立のいきさつを詳しく述べている。

この論文は、東濃歌舞伎保存会の成立過程と振付師・松本団升との関わりの深さに重点が置かれている。また、美濃・飛騨地方の地芝居保存会の一覧表が掲載されている。しかし、加子母歌舞伎保存会の内容については、詳しく述べられてはいなかった。

また、加子母歌舞伎保存会については、若原唯子、清水裕之、村山顕人が「岐阜県の芝居小屋・地歌舞伎の運営体型」（『東海支部研究報告集 52』, 565-568, 2014）で分析している。これは明治座を含めた5つの芝居小屋（明治座、美濃歌舞伎博物館相生座、村国座、白雲座、鳳凰座）の運営体系や方法を明らかにし、その持続性を探るものである。

調査方法は関係者へのヒアリングが主であり、明治座関連組織の構造を図解で示している。そして、加子母歌舞伎は人口規模から見ると、参加者が少ないという問題点を指摘している。

しかし、具体的な加子母歌舞伎の運営方法については言及されていなかった。

よって、この論文が主眼を置く加子母歌舞伎の運営システムや、歌舞伎と農村舞台が存続してきた理由については、既往研究では扱われていなかった。

1.3 研究の流れ

まず、文献調査と聞き取り調査によって、加子母歌舞伎の歴史と現況、そして保存会の運営方法を調べる。次に、歌舞伎関係者に対面聞き取り調査を行うことによって、参加者の意識を調べる。

1.4 本論文の構成

本論文の構成を以下に示す。

〈第1章〉

本論文の目的と意義、研究の流れについて述べる。

〈第2章〉

加子母歌舞伎の歴史と現況について述べる。

〈第3章〉

加子母歌舞伎保存会の運営方法について述べる。

〈第4章〉

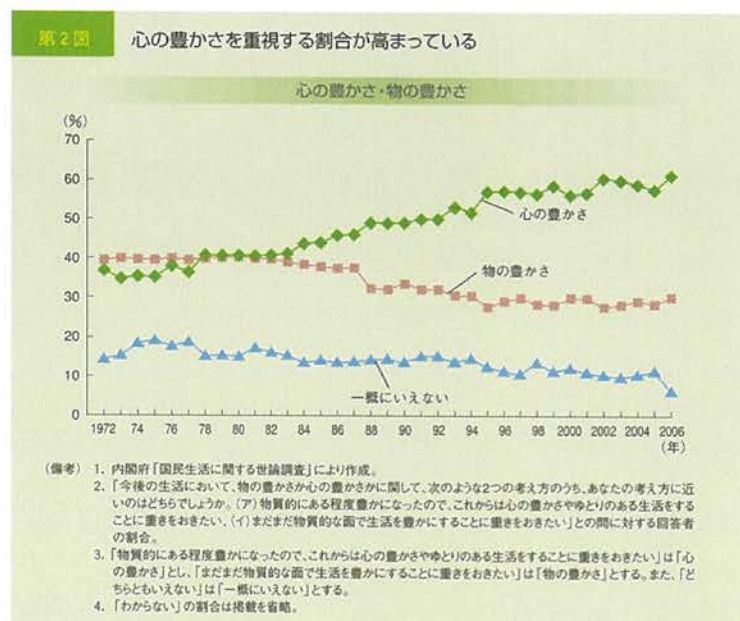
調査の方法、結果について述べ、分析を行う。

〈第5章〉

本研究の総括と今後の課題について述べる。

1.5 第1章註

- 1968年にローマで初会合を開き、1970年に正式発足した国際的な民間組織である。世界各国の科学者、知識人、財界人によって構成され、天然資源の枯渇や環境汚染、人口増加などの諸問題を研究・提言している。
- 原題『The Limits to Growth』。ローマ・クラブが、マサチューセッツ工科大学のデニス・メドウズ（1942-）らに委託し、1972年に発表した、地球資源の有限性についての研究である。人口と工業投資が幾何級数的成長を続けると、有限な天然資源の枯渇と環境汚染の深刻化により、100年以内に成長は限界点に達するという結論に至る。
- 下図を参照



今後の生活で心の豊かさと物の豊かさのどちらかに重点をおくか
 出典『平成19年版国民生活白書（全文HTML）|はじめに』
http://www5.cao.go.jp/seikatsu/whitepaper/h19/01_honpen/html/07sh000101.html

4. 東濃地方は多治見市、土岐市、瑞浪市、恵那市、中津川市で構成される岐阜県の一地方である。



東濃地方の位置図

5. 東濃歌舞伎保存会は1965（昭和40）年に設立された、東濃地方の歌舞伎保存会をとりまとめる組織である。現在15団体が所属している。詳しくは第3章で述べる。

第2章 加子母歌舞伎の歴史と現況

本章では、まず対象地域の概要を地理・歴史などの分野ごとに記述する。次に、「地芝居」関連用語の定義について述べる。その後、歌舞伎の歴史と現況について、「創始期」「停滞期」「再興期」の3つの時期に分けて詳述する。

2.1 加子母地域の概要

本節では、加子母地区の地理、歴史、文化、産業について詳述する。

(1) 地理

加子母は、長野県との県境に位置する中山間地域である。南の付知・川上村と合わせて「裏木曾」とも呼ばれている。(図 2.1-1)

人口は2015年9月1日現在で3019人、面積は114.16km²であり、そのうちの94%を山林が占めている。おおむね東西に12.5km、南北に13kmの広がりを持つ地域である。

生活圏としては、北から上中下の3地区に分かれている。上は「小郷」「小和知」、中は「二渡」「番田」「中切」、下は「上桑原」「中桑原」「下桑原」「万賀」「角領」の5集落で、それぞれ1つの村落共同体を形成している。下の5集落は合わせて「下半郷」と呼ばれている。

上流の小郷集落で海拔720m、下流の角領集落では430mと、北に高く南に低い地形になっている。

南北には、国道257号と白川(通称加子母川)、またそれに沿って旧道と飛騨街道が走っている。



図 2.1-1 加子母の位置図
(岐阜県中津川市加子母全図より)

(2) 歴史

加子母村は、大永年間（1521～1527年）から始まり、以後自律的な地域として約500年の歴史をもっている。1615（元和1）年から尾張藩の飛び地領に加えられ、明治維新後は1889（明治22）年に岐阜県恵那郡に編入された。

さらに、2005年の「平成の大合併」によって中津川市の一部となり、現在に至る。

(3) 文化

江戸から明治にかけて、農民たちによる地芝居の上演が全国的に流行した。加子母も例外ではなく、明治の中頃から大正のはじめ頃には、集落ごとに農村舞台が建設された。その多くは大正から昭和にかけて廃絶したが、後述する明治座のみが現存している。

明治座で続けられてきた歌舞伎は、高度経済成長期を含む昭和30～40年代にブランクがあり、一度途絶えかけたが、地元の人々の協力によって1973（昭和48）年に歌舞伎保存会が復活した。以降、毎年続けられている歌舞伎公演は、2015（平成27）年に第43回を迎えた。

(4) 産業

加子母の主な産業は、農業・畜産・林業・木工業である。

特に森林資源に恵まれた土地であり、国有林からは伊勢神宮の式年遷宮に供される木材が供給されている。また加子母で生産されるひのきは「東濃ひのき」と呼ばれ、良質な建築材として各地に出荷されている。

農業では7月から10月にかけてトマトが収穫される。飛騨牛の肥育では県内有数の産地でもある。

2.2 関連用語について

「地方の村や町で行われる、プロではない地域住民が役者になって演じる芝居」を定義する際、今日の学術論文では「村芝居」「地芝居」「地歌舞伎」「農村歌舞伎」など、いくつかの用語が使われている。まず、それぞれの用語がどのような場合に使われているかを詳述し、その後この論文における用語の定義を述べる。

2.2.1 それぞれの用語の使用例

(1) 「村芝居」と「地芝居」

安田徳子は、芝居の上演される場所を都市と農村に大別し、農村で行われる芝居を「村芝居」としている。さらに「村芝居」を、「買芝居」（役者の旅興行、近郊の役者村・半プロの役者の巡業）と「地芝居」（村人が演じるもの）に分けている¹。（表 2.2-1）

表 2.2-1 安田徳子による村芝居の分類

場所	分類		上演詳細
都市	大芝居（櫓芝居）		三都（常設小屋） 江戸 京 大坂
	中・小芝居（宮地芝居・百日芝居）		常設・仮小屋 江戸 京 大坂
	地方芝居		地方都市（宮地芝居・百日芝居、常設・仮小屋） 城下町 門前町 宿場・港町 社寺の境内・門前・市場 大芝居・中小芝居役者の旅興行、地方役者（地役者）の興行
農村	村芝居	買芝居（受け芝居・雇芝居）	プロによる芝居
		地芝居（地狂言・習芝居・農村歌舞伎）	地元住民による芝居

また、守谷毅も、都市の大芝居に対応するものとして「村芝居」の語を使い、農民自身の演じる歌舞伎は「地芝居」としている²。

このように、地芝居は買芝居に対応する用語として扱われる場合が多い³。

景山正隆は、「『地芝居』は、近世（江戸時代）の文献にも見られる、古く江戸時代から使われてきた歴史のある呼称」と述べている⁴。

そして、景山正隆が顧問を務める全日本地芝居連絡協議会⁵は、「全国地芝居サミット」を毎年開いており、「地芝居」をより一般的な語として扱っている。

(2) 「地歌舞伎」

岐阜県内では、「地歌舞伎」という名称が頻繁に使われている。

岐阜県が推し進める「岐阜の宝もの認定プロジェクト」⁶には、「東濃地方の地歌舞伎と芝居小屋（恵那市・中津川市・瑞浪市）」という名称が登録されている。このことがきっかけとなり、「岐阜自慢ジカブキプロジェクト」が発足した⁷。

ジカブキプロジェクトでは、「有名な歌舞伎役者に代表されるプロが演じる歌舞伎」を「大歌舞伎」と呼ぶことに対して、「地歌舞伎」を「地元の素人役者たちによって演じられる、地方に根付いた歌舞伎」と定義している⁸。さらに、

地芝居という呼び名もありますが、近年、芝居という言葉は歌舞伎だけではない幅広い意味を持つようになったため、岐阜県では「地歌舞伎」を通称としています⁸。

と説明しており、岐阜県における見解を示している。

(3) 「農村歌舞伎」

この語は、「農村歌舞伎舞台」として農村舞台を表現する場合に使うことがほとんどである⁹。この用語の使用頻度が低いのは、村人による芝居が必ず農村で行われるわけではなく、漁村や山村で行われる場合も多いことが理由であると考えられる。地域によっては、岐阜県の「地歌舞伎」のような意味合いで「農村歌舞伎」を用いる場合もある¹⁰。

2.2.2 本論文における定義

前節で確認した用語の定義から、本論文においては、「地芝居」という単語を「都市の大歌舞伎に対して、地方で行われ、素人の住民が自分で演じる歌舞伎」（加子母歌舞伎保存会で使われている「歌舞伎」の意味合いと同じである）とする。そして、「買芝居」は「地方で行われる、村外の役者が演じるもの」、「村芝居」は「地方で上演される芝居全般で、地芝居と買芝居を合わせたもの」とし、本論文ではこの3つの語を使う。

2.3 第一期：創始期（～1943年）

2.3.1 地芝居の発生

全国的な地芝居の成立時期は、江戸時代中期の宝暦～天明（1751～1789年）ごろとされている¹¹。文献資料は現存しないが、加子母地域においても、ほぼ同時期に始まったと考えられる。これらの地芝居の発生には、中央の大歌舞伎が大きく関わっている。

江戸時代に、常設の芝居小屋があり、歌舞伎の上演が許可されていた場所は、基本的には幕府の定めた三都（江戸、京都、大阪）のみであった。他の地域では、村人たちが集まって娯楽に興じることは厳しく規制されていた。それは、農民たちが力を持って団結することを幕府が恐れていたためであった¹²。例を挙げると、群馬県赤城山麓の富士見村においては、無届の上演が発覚した場合、役人が踏み込んで検挙することもあった¹³。

そこで村人たちは、歌舞伎の上演許可が唯一出る日（村の遊び日）や氏神の祭礼日を利用した¹⁴。このような日には三都の役者や地方役者が旅興行をし、村人たちはそれを買芝居として楽しんだ。次第に、村人たちは旅役者から指導を受けたり、芝居の真似をしたりするようになる。こうして、それぞれの地域で独特の地芝居が演じられるようになった¹⁵。

一方で、加子母の属する美濃地方は尾張藩の直轄領であり、農村の撫民政策として地芝居の上演が容認されていた。幕府にとって重要な木材生産地であったため、特別に芝居が許容されていたのである¹⁶。

美濃地方の村芝居については、1621（元和7）年の『上呂村久津八幡宮立願書』に記されたものが最古であり、獅子頭を奉納したという記録が残されている¹⁷。

明治に入って村芝居はますます盛んになり、1887（明治20）年頃にはピークを迎えた¹⁸。しかし、岐阜県では1872～1880（明治5～13）年にかけて地芝居が禁止され、また1902（明治35）年には明治政府による地芝居の取り締まり強化があった¹⁹。この取り締まり強化により、鑑札を持たない者が芸能活動をするのは違法とされた。他方で、農民が歌舞伎をするためには金を払って鑑札を得ればよいということになり²⁰、可児・帷子の衣装屋では歌舞伎の衣裳と一緒に鑑札の貸し出しも行われていた²¹。

2.3.2 舞台の変化

このような村芝居は、はじめは民家や仮設の舞台で行われていた。やがて、神社の境内に常設の舞台（農村舞台）を設けて演じられるようになった²²。それは神に奉納する芸能として上演すると同時に、村人たちが楽しむためであった。これまで村が営んでいた祭りの行事に歌舞伎上演を付け加えることで、歌舞伎に祭礼芸能の位置を与えたのである²³。

全国的な規模では、化政期（1804～1830年）を境に、村芝居の舞台の常設化が始まったとされている²⁴。

特に岐阜県の東濃地方は、養蚕・製糸業の発展により付近の農民が比較的裕福であったことから²⁵、客席に屋根のついた劇場型の農村舞台が定着していくことになる。

加子母にも、劇場型の農村舞台が1894（明治27）年に建設された。万賀地区²⁶の共同財である農村舞台「明治座」には、当時製糸工場で働いていた村の娘たちが寄贈した「娘引幕」が現存している。

2.3.3 加子母内の農村舞台と地芝居

加子母には、明治座の他にもかつて6つの舞台が存在していた。(表 2.3-1)

表 2.3-1 加子母の舞台

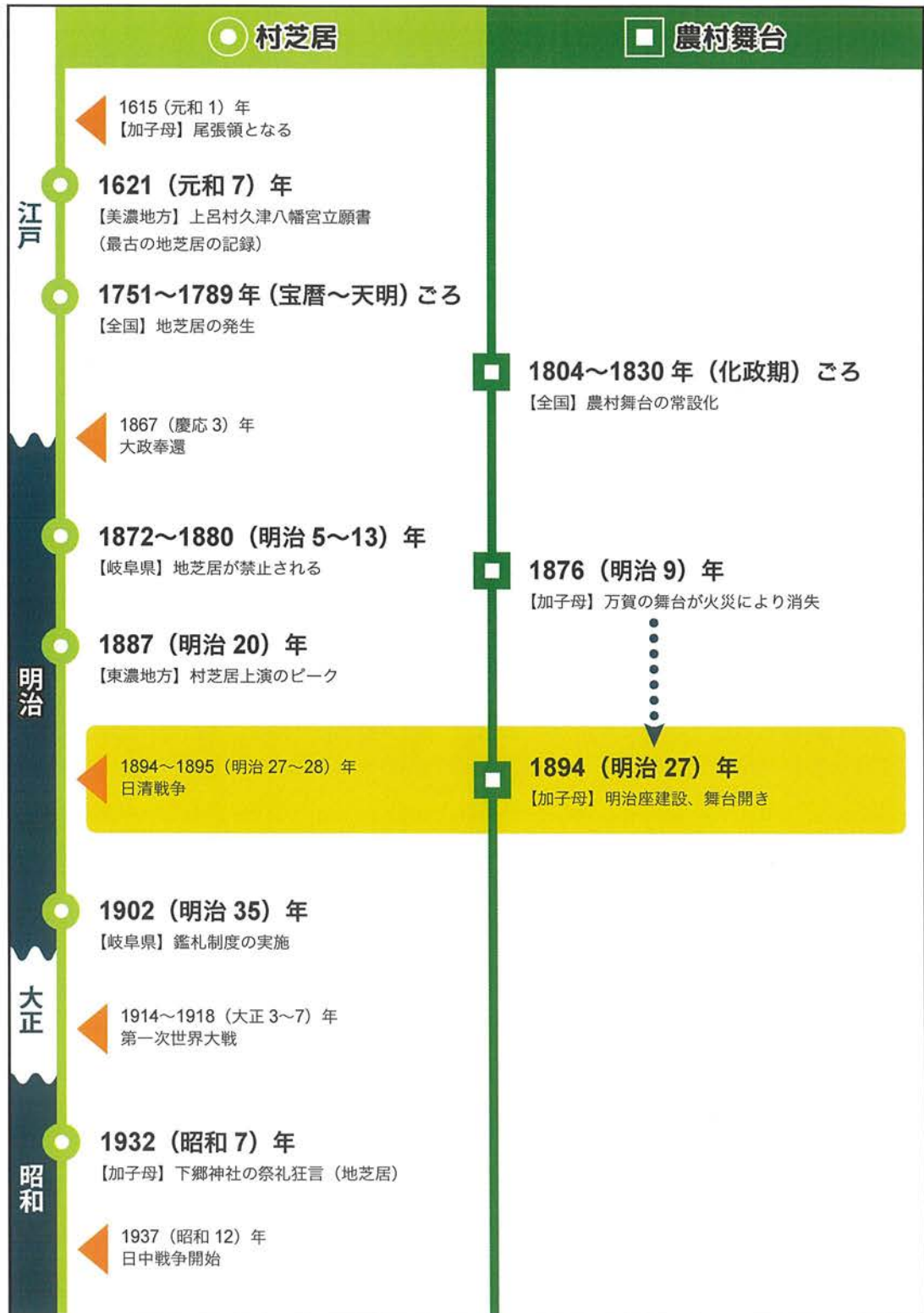
舞台名	所在地	建築年代	廃絶年代	特記事項
豊年座	小郷	不明	大正中期	牧水無神社
永楽座	小和知	明治32年	昭和38年	字鎌井野
宮本座	中切	不明	明治初期	水無神社
神名座	上桑原	不明	明治初期	神明神社
大正軒	下桑原	大正3年	大正中期	玉屋町
明治座	下桑原	明治27年		下郷神社
万賀の舞台	万賀	不明	明治9年	天皇神社

明治座の建設以前にも、下半郷に舞台（万賀の舞台）があったが、1876（明治9）年に火災で消失した。

明治座の舞台開きは、1894（明治27）年の12月10日から13日の4日間にわたって行われた。演目は地芝居ではなく、買芝居であった。

また、1932（昭和7）年に明治座で行われた下郷神社の祭礼狂言は、加子母においては昭和最大規模の地芝居の祭典であった²⁷。

表 2.3-2 加子母歌舞伎年表 第一期：創始期



2.4 第二期：停滞期（1944～1969年）

2.4.1 第二次世界大戦前後

第二次世界大戦（1939～1945年）により日本が戦争状態に突入すると、歌舞伎公演のための芝居小屋は次々と軍需倉庫になったり、閉鎖されたりした。そのため、村人たちが祭礼や娯楽を楽しむことはできなくなった。

加子母でも、明治座は1944（昭和19）年から1945（昭和20）年まで軍需倉庫として使われた。その際に桁席が壊され、軍の撤退後も劇場として使えない状態になっていたため、下半郷の有志が寄付を募って修理した。そして、1956（昭和21）年には「明治座保護会」が結成された。

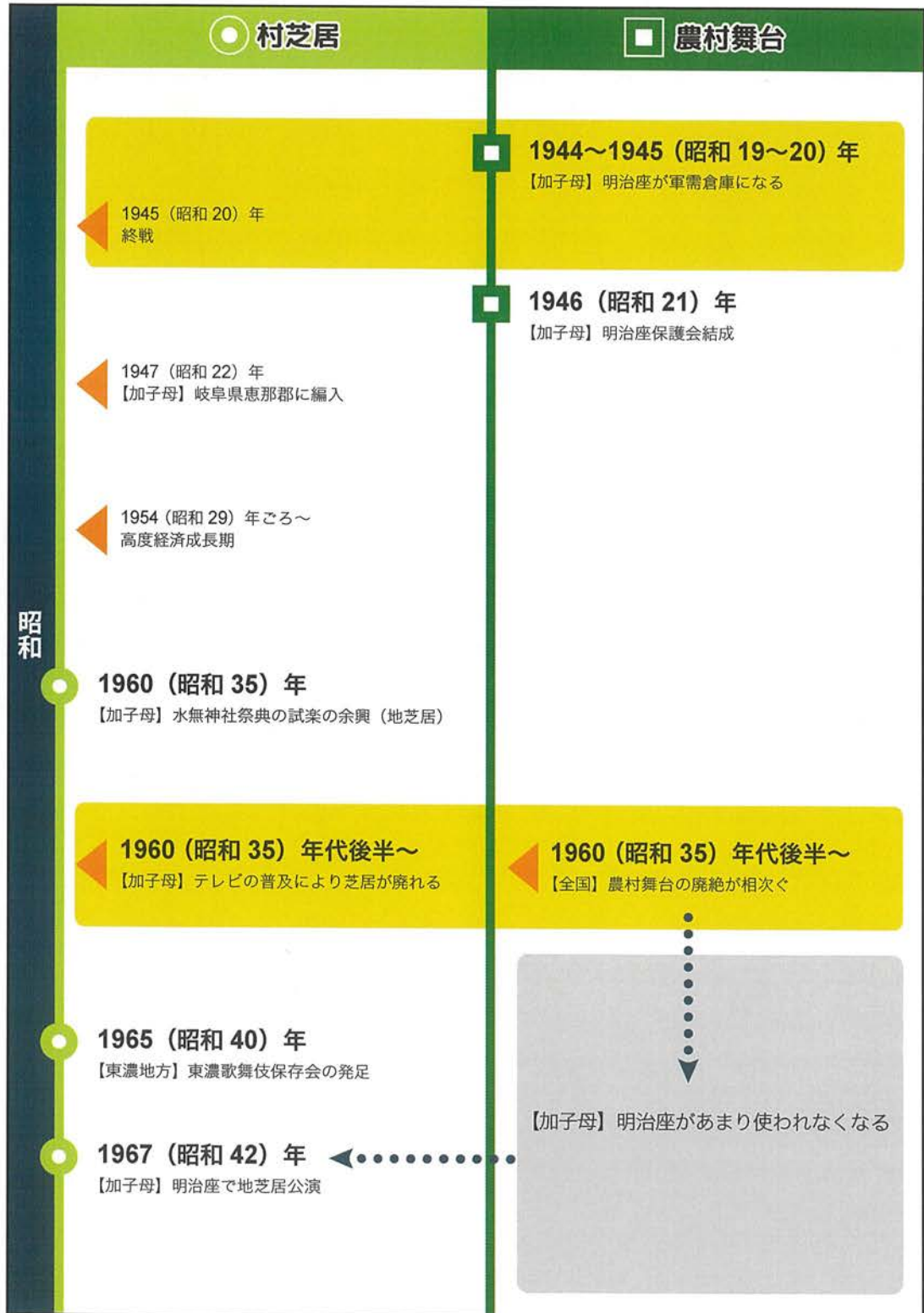
1948（昭和23）、1951（昭和26）年には明治座保護会が松竹大歌舞伎の役者を呼び、公演が行われた。また、1960（昭和35）年には水無神社祭典の試楽の余興で、地芝居の公演があった²⁸。

2.4.2 高度経済成長期

その後、戦争の終わりとともに地芝居の上演も復活した。しかし、その盛況も長くは続かなかった。高度経済成長期の訪れとともに、人々の関心はテレビや映画など、別の娯楽へと移っていった。同時に農山村の過疎化も深刻になり、演者も観客も確保できない状況になったため、多くの地芝居が消滅した²⁹。

やがて、昭和40年代に入った加子母では、舞台である明治座がほとんど使われなくなった。1967（昭和42）年には明治座で地芝居復活公演が行われたが、それ以降は村芝居の上演も途絶えることになる³⁰。

表 2.4-1 加子母歌舞伎年表 第二期：停滞期



2.5 第三期：再興期（1970年～）

2.5.1 加子母歌舞伎愛好会の成立

1970（昭和45）年から1973（昭和48）年にかけて、文化庁文化財保護部記念物課は、重要有形民俗文化財の国指定候補に挙げられた全国の農村舞台の選考資料を作成するため、調査を行った³¹。その際、明治座も国の文化財の精査対象になった。しかし、やってきた国の調査団に、創建当時は天井がなかったことに言及され、「文化財指定のために天井をはがすべきだ」と言われたため加子母の人々は反発し、調査団を追い返した。代わりに1972（昭和47）年、明治座は岐阜県の重要有形民俗文化財に指定された。そして、翌年の1973（昭和48）年、「加子母歌舞伎愛好会」（翌年に「加子母歌舞伎保存会」と改称される）が結成され、加子母は県内でも数少ない、農村舞台と歌舞伎保存会が揃って存在する地域となった。

2.5.2 歌舞伎保存会の歩み

1973（昭和48）年の第1回公演以後、加子母歌舞伎は毎年公演を続けてきた。そして、1975（昭和50）年には岐阜日日賞教育文化賞³²を、1978（昭和53）年には岐阜県芸術文化顕彰³³を、1986（昭和61）年には文化庁の地域文化功労者賞³⁴を受賞している。1980年代、観客数は一時的に減ったが、小中学校生やIターン者などの新たな演者を取り入れ、さらに保存会を再組織することによって公演が続いてきた。

2015（平成27）年には、約40年ぶりに明治座が大規模に改修され、こけら落としとして第43回公演を迎えた。

表 2.5-1 加子母歌舞伎年表 第三期：再興期



2.6 小結

江戸時代の加子母では、幕府の撫民政策として地芝居上演を容認されており、明治期には明治座が建設されたこともあって、地芝居が盛況を博した。しかし、昭和に入ってから人々の興味は別の娯楽へと移り、明治座と地芝居は衰退した。

高度経済成長期の終わりとともに、地域の文化財を見直す動きが生まれ、明治座が再注目されたことによって加子母歌舞伎が復活した。その後、明治座の主な活用コンテンツは歌舞伎が担ってきた。

昭和期、歌舞伎愛好会が発足する以前の加子母では、地芝居の上演は数えるほどしか行われていなかった。むしろ再興期に入ってから、定期公演が定着したのである。

次章以降は、1973（昭和48）年に結成された加子母歌舞伎保存会の沿革や、運営方法について論じる。

2.7 第2章註

1. 安田徳子『地方芝居・地芝居研究—名古屋とその周辺』（おうふう, 2009）
15（以降『地方芝居・地芝居研究』とする）
2. 守谷毅『村芝居—近世文化史の裾野から』（平凡社, 1988）8（以降『村芝居』
とする）
3. 館野太郎「地芝居の現在とその課題」『筑波大学地域研究 34』（筑波大学大
学院地域研究研究科, 2008）181-202.
4. <http://www.asahi-net.or.jp/~tq7k-wtnb/kageyamal.htm>
5. <http://www.jfpaa.jp/kyougikai/kyougikai.html>

全国地芝居連絡協議会は、公益社団法人全日本郷土芸能協会の主要構成メンバーである。全国の地芝居関係者との交流を図り、地域社会における地芝居の保存振興と発展に寄与することを目的に、1998（平成10）年に結成された。

6. http://www.pref.gifu.lg.jp/sangyo/kanko/kanko-shinko/s11334/index_15532.html

岐阜県は、2007（平成19）年に「みんなでつくろう観光王国飛騨・美濃条例」を制定し、飛騨・美濃じまん運動を推進している。飛騨・美濃じまん運動とは、「知ってもらおう、見つけだそう、創りだそうふるさとこのじまん」を合い言葉に、身近な観光資源に磨きをかけて情報発信していく取り組みを通じて、観光産業を基幹産業に発展させることで、地方の特性を活かした誇りの持てるふるさとづくりを進めるものである。

そして、岐阜の宝もの認定プロジェクトは、飛騨・美濃じまん運動を推進するための主要プロジェクトの一つである。

7. <http://www.jikabuki.com/>

岐阜の宝ものとして認定された「東濃の地歌舞伎と芝居小屋」を盛り上げるため、「岐阜自慢ジカブキ・プロジェクト」事務局が立ち上げられた。娯楽だけではない新たな地歌舞伎のあり方を目指し、東濃から地歌舞伎の魅力を発信している。

活動方針は、①地歌舞伎及び東濃地方の観光情報の発信 ②地歌舞伎を活用した観光プログラムの開発 ③地歌舞伎振興のための支援（地元保存会の活動資金の獲得と活動支援に繋げる）である。

8. http://www.jikabuki.com/learning_jikabuki/about_jikabuki/9. 2015年11月10日に CiNii Articles（国立情報学研究所論文情報ナビゲータ <http://ci.nii.ac.jp/>）で検索した結果、「農村歌舞伎舞台」では33件の論文が該当した一方、「農村歌舞伎」は15件であった。10. http://www.town.shodoshima.lg.jp/kurashi/kyoiku_bunka/geijyutsu_bunka.html

小豆島の肥土山農村歌舞伎と中山農村歌舞伎が有名である。

11. 『村芝居』122.

12. 小栗克介（編）『美濃の地歌舞伎』（岐阜新聞社，1999）10-11（以降『美濃の地歌舞伎』とする）

13. 『村芝居』81.

14. 『地方芝居・地芝居研究』15.

15. 同上203.

16. 『美濃の地歌舞伎』12.

17. 同上13, 101.

18. 同上103.

19. 岐阜県教育委員会（編）『岐阜県の農村舞台－昭和46年度岐阜県農村舞台緊急調査報告』（岐阜県教育委員会，1972）29.

20. 『村芝居』103-104.

21. 小栗幸江（編）『ぎふ地歌舞伎衣裳』（岐阜新聞社，2015）119.

岐阜県内の地芝居用の衣裳屋は、「瑞浪・山野内の衣裳屋（安藤家）」「恵那・東野の衣裳屋（伊藤家）」「可児・帷子の衣裳屋（山形屋）」「各務原の衣裳屋（大谷興行）」「高山の衣裳屋（八伊）」の5軒が現在確認されている。

22. 『地方芝居・地芝居研究』 210.
23. 『村芝居』 125.
24. 同上 161.
25. 後藤和子「地域社会における経済発展と文化形成—明治初期の岐阜県東濃地方の劇場型農村舞台を素材として」『経済論叢別冊地域と研究 11』（京都大学, 1996） 5-18.
26. 加子母の生活圏は、小郷・小和知・二渡・番田・中切・上桑原・中桑原・下桑原・万賀・角領の 10 区に分かれる。下の 5 部落は合わせて下半郷と呼ばれている。
27. 景山正隆『愛すべき小屋—村芝居と舞台の民俗誌』（冬樹社, 1990） 490（以降『愛すべき小屋』とする）
28. 加子母村誌編纂委員会『加子母村誌』（加子母村, 1972） 598.
29. 『地方芝居・地芝居研究』 220.
30. 『愛すべき小屋』 491.
31. 同上 6.
32. <http://www.gifu-np.co.jp/tokusyuu/2015/taisyo/>
 現在は「岐阜新聞大賞」に改称されている。「岐阜新聞社が県内の学術、教育、産業、文化などの各分野の発展に多大な貢献をした個人、団体・企業に贈る」ものである。
33. <https://www.pref.gifu.lg.jp/pref/s11105/yosan-hensei/26koukai-1/349.doc>
 「伝統文化の保存・継承に尽力された功労者を顕彰するとともに、芸術文化の各分野において優れた業績を上げ、又は将来その成果が期待できる個人・団体を顕彰又は奨励し、芸術文化の振興を図る」目的で岐阜県が行っている。
34. <http://www.bunka.go.jp/seisaku/geijutsubunka/jutenshien/geijutsuka/>
 「全国各地域において、芸術文化の振興、文化財の保護に尽力するなど地域文化の振興に功績のあった個人及び団体に対し、その功績をたたえ、文部科学大臣が表彰」するものである。

第3章 歌舞伎保存会の運営システム

本章では、1973（昭和48）年に発足した加子母歌舞伎保存会（結成当初は加子母歌舞伎愛好会）について、その系譜と運営方法、関連組織について詳述する。

3.1 歌舞伎保存会の系譜

以下に、1973（昭和48）年に加子母歌舞伎愛好会として発足した、加子母歌舞伎保存会の系譜を示す。

(1) 初代会長 中島正夫（1973年8月～1974年12月）

表 3.1-1 保存会年表（初代会長時代）

年	月	出来事	場所	演目
1973 (昭和48)	8	加子母歌舞伎愛好会結成（会長 中島正夫）		
	9	加子母歌舞伎第1回公演	明治座	・絵本太功記（尼ヶ崎閑居の場） ・一乃谷嫩軍記（熊谷陣屋の場） ・仮名手本忠臣蔵（一力茶屋の場） ・御所桜堀川夜討（弁慶上使の場） ・義経千本桜（道行初音鼓吉野山）
	11	第10回東濃歌舞伎大会 優勝	明治座	
1974 (昭和49)	7	加子母歌舞伎保存会と改称		
		岐阜県民俗芸能大会	中津川市	
		中日新聞社より感謝状を受ける		
	9	第2回公演	明治座	・菅原伝授手習鑑（車止の場） ・良辨杉子安由来（二月堂） ・絵本太功記（尼ヶ崎閑居の場） ・屋島日記後日譚（日向島） ・仮名手本忠臣蔵（一力茶屋の場） ・奥州安達原（袖狹祭文の場）
	10	NHK新日本紀行「村の一座」で全国に紹介される 岐阜県文化財記録映画に収録される		
	11	第11回東濃歌舞伎大会 準優勝	中津川市	
12	初代会長 中島正夫死亡 2代会長 安江清三 就任			

明治座が岐阜県の重要有形民俗文化財に指定された際、初代会長が加子母村役場にはたらきかけたことにより、加子母歌舞伎愛好会が始まった。

この時の公演は2日間あり、敬老会公演が1日目、一般公演が2日目であった。

また、第2回公演の様子はNHKの「新日本紀行」に取材され、全国に放映された。さらにこの時「加子母歌舞伎愛好会」から「加子母歌舞伎保存会」に改称している。

(2) 2代会長 安江清三 (1974年12月～1979年3月)

表 3.1-2 保存会年表 (2代会長時代)

年	月	出来事	場所	演目
1975 (昭和50)	2	岐阜日日賞教育文化賞受賞		
	9	第3回公演 (加子母村青年団、小中学校生が出演)	明治座	<ul style="list-style-type: none"> ・お好み三番叟 中学生 ・白浪五人男 (稲瀬川勢揃いの場) 小学生 ・菅原伝授手習鑑 (寺子屋の段) ・一条大蔵郷譚 (奥殿の場) ・お目見得曾我対面 (工藤館の場) 青年団 ・近江源氏先陣館 (盛綱陣屋)
1976 (昭和51)	9	第4回公演	明治座	<ul style="list-style-type: none"> ・苅萱桑門筑紫♣車へん十栄 (高野山の場) ・本朝二十四考 (十種香の場) ・三国一曾我礎 (由比ヶ浜の場) ・増補忠臣蔵 (本蔵下屋敷の場) ・恋飛脚大和往来 (新口村の場) ・絵本太功記 (尼ヶ崎閑居の場)
	11	第13回東濃歌舞伎大会 優勝	恵那市	
1977 (昭和52)	9	第5回公演 (青年学級歌舞伎サークルが発足、青少年故郷の 芸能を守る運動として参加)	明治座	<ul style="list-style-type: none"> ・恋女房染分手綱 (重の井子別れの場) ・雪夕恵鉢の木 (佐野源左衛門住家の場) 青年学級 ・新版歌祭文 (野崎村の場) ・忠臣二渡目清書 (寺岡切腹の場) ・一乃谷嫩軍記 (熊谷陣屋の場) ・神靈矢口の渡 (頓兵衛住居の場)
	11	第14回東濃歌舞伎大会	福岡町	
1978 (昭和53)	9	第6回公演 (子供歌舞伎上演)	明治座	<ul style="list-style-type: none"> ・艶容女舞衣 (酒屋の場) ・絵本太功記 (尼ヶ崎閑居の場) 子供歌舞伎 ・曇妖術滝夜叉物語 (岩谷の場) ・義経千本桜 (釣瓶鉾屋の場)
	11	岐阜県芸能文化顕彰受賞		

初代会長が亡くなったため、第3回公演から会長が交代した。

第3回公演は、加子母青年団と小中学生が参加している。そして第5回公演時には、青年学級歌舞伎サークルが発足した。

また、第6回公演から子供歌舞伎が開始した。

(3) 3代会長 田口唯夫 (1979年4月～1989年4月)

表 3.1-3 保存会年表 (3代会長時代)

年	月	出来事	場所	演目
1979 (昭和54)	4	3代会長 田口唯夫 就任		
	9	第7回公演	明治座	・木下薩狭間合戦 (竹中砦の場) ・源平咲分牡丹 (畠山重忠館の場) ・義経千本桜 (道行初音旅) 子供歌舞伎 ・仮名手本忠臣蔵五段目 (鉄砲渡しの場) ・源平布引の滝 (九郎住家の場)
1980 (昭和55)	9	第8回公演	明治座	・源平布引の滝 (義賢館の場) ・由良港千軒長者 (浜辺の家) 子供歌舞伎 ・箱根靈験堂仇討 (滝の場)
1981 (昭和56)	9	第9回公演及び第17回東濃歌舞伎大会 合同開催	明治座	・お好み三番叟 小学生衆 ・会稽曾我の礎 (曾我中村の場) ・恋飛脚大和往来 (新ノ口村の場) 中津川市 ・仮名手本忠臣蔵 (一力茶屋の場) ・絵本太功記 (尼ヶ崎閑居の場) 恵那市 ・一乃谷嫩軍記 (熊谷陣屋の場)
1982 (昭和57)	9	10周年記念公演 (村の名士が出演)	明治座	・彦山権現誓助剱 (毛谷村助住居の場) ・三日太平記 (嘉平次住家の場) ・菅原伝授手習鑑 (寺子屋の段) ・お目見得源平加子母だんまり (村の名士) ・道行旅路の花笠 (忠臣蔵三段目) 子供歌舞伎
1983 (昭和58)	9	第11回公演	明治座	・伝言石井焔咲 (浜名将監館の場) ・神靈矢口の渡 (頓兵衛住居の場) ・奥州安達原 (三段目神荻祭文) ・絵本太功記 (尼ヶ崎閑居の場) 子供歌舞伎
1984 (昭和59)	9	第12回公演 (松扇会舞踊)	明治座	・本朝二十四考 (十種香の段) 子供歌舞伎 ・義経千本桜 (寿し屋の場) ・実録先代萩 (御殿の場) ・舞踊組曲
	11	第20回東濃歌舞伎大会	恵那市	
1985 (昭和60)	2	加子母松扇会発足		
	9	第13回公演	明治座	・御所桜堀川夜討 (弁慶上使の場) ・三国一曾我礎 (由比ヶ浜の場) ・良弁杉子安由来 (二月堂の場) ・舞踊劇「曾我物語」
1986 (昭和61)	9	第14回公演	明治座	・玉藻前旭袂 (道春館の場) ・絵本太功記 (尼ヶ崎閑居の場) 子供歌舞伎 ・舞踊源平お目見得だんまり 松扇会 ・子供舞踊 ・心中宵庚申 (八百屋の場)
	11	地域文化功労者として文部大臣表彰受賞		
1987 (昭和62)	9	15周年並びに文部大臣表彰受賞記念公演	明治座	・御目見得曾我対面 (工藤館の場) 子供歌舞伎 ・菅原天神記 (松王下屋敷) ・梶原三平嘗石切 ・義経千本桜 (道行初音鼓吉野山) ・舞踊十二曲
	11	第21回東濃歌舞伎大会	明治座	
1988 (昭和63)	9	第16回公演	明治座	・岸姫松譽盛 (三段目飯原兵衛屋敷の場) ・藝妖術滝夜叉譚 (岩屋の場) ・飯盛山時雨 (白石家より飯盛山迄) ・文覚上縁大杉 (松本団升師創作演出)

(4) 4代会長 細野廣志 (1989年5月～1996年6月)

表 3.1-4 保存会年表 (4代会長時代)

年	月	出来事	場所	演目
1989 (平成1)	5	4代会長 細野廣志 就任		
	9	村制100周年記念 第17回公演	明治座	・平成三番叟 ・舞踊組曲十曲 ・由良湊千軒長者 子供歌舞伎 ・菅原伝授手習鑑 (寺子屋の段) ・新牧歌祭文 (野崎村の場)
1990 (平成2)	9	第18回公演	明治座	・加賀見山旧錦絵 (長局の段) ・恋女房染分手綱 (重の井子別れの場) ・菅原伝授手習鑑 (車止の場) ・舞踊十二曲
		第22回東濃歌舞伎大会	中津川市	・菅原伝授手習鑑 (車止の場)
1991 (平成3)	9	第19回公演	明治座	・伝言石井帰咲 (浜名将監館の場) ・ひらがな盛衰記 (源太勘当) ・藝妖術滝夜叉譚 (岩屋の場) 子供歌舞伎 ・舞踊九曲
1992 (平成4)	9	20回記念公演	明治座	・一乃谷嫩軍記 (熊谷陣屋の場) ・絵本太功記 (尼ヶ崎閑居の場) ・仮名手本忠臣蔵 (一力茶屋の場) ・忠臣蔵 (道行の場)
1993 (平成5)	9	第21回公演 (第1回飛騨・美濃歌舞伎大会加子母'93)	明治座	・新版歌祭文 (野崎村)
1994 (平成6)	9	第22回公演 (加子母村松扇会10周年記念大会)	明治座	・玉藻前旭袂 (道春館の場) ・一条大藏卿 (大藏館奥殿の場)
1995 (平成7)	10	第23回公演 (緑の伝統文化大学 in かしも)	明治座	・藝妖術滝夜叉譚 (筑波山岩屋の場) ・神靈矢口の渡 (頓兵衛住居の場) ・絵本太功記 (尼ヶ崎閑居の場) ・義経千本桜 (寿司屋の場)

第20回公演から、公演が1日のみになっている。

1993(平成5)年には、飛騨・美濃歌舞伎大会(3.3.4で詳述する岐阜県地歌舞伎保存振興協議会が主催する)の第1回が明治座で行われた。

(5) 5代会長 田口茂雄 (1996年7月～2004年3月)

表 3.1-5 保存会年表 (5代会長時代)

年	月	出来事	場所	演目
1996 (平成8)	7	5代会長 田口茂雄 就任		
	10	第24回公演	明治座	・白浪五人男 (稲瀬川勢揃いの場) 子供歌舞伎 ・絵本太功記 (尼ヶ崎閑居の場) 子供歌舞伎 ・元禄忠臣蔵 (南部坂雪の別れ) ・近江源氏先陣館 (盛綱陣屋)
1997 (平成9)	9	第25回公演	明治座	・義経千本桜 (道行初音鼓吉野山) ・箱根靈験堂仇討 (滝の場) ・彦山権現誓助剱 (毛谷村六助住家の場) ・絵本太功記 (尼ヶ崎閑居の場) ・加子母だんまり (幼曾我)
		歌舞伎フォーラム	明治座	・創作芝居 (袈裟と盛遠) 一部
1998 (平成10)	9	第26回公演	明治座	・絵本太功記 (尼ヶ崎閑居の場) ・白浪五人男 (稲瀬川勢揃いの場) ・阿波の鳴門 (どんどろ大師) ・舞踊 松扇会 ・仮名手本忠臣蔵五段目 (鉄砲渡しの場)
	11	全国芝居小屋会議 第6回飛騨・美濃歌舞伎大会	明治座 鳳凰座	・創作芝居 (袈裟と盛遠) 一部・二部 ・義経千本桜 (道行初音鼓吉野山)
1999 (平成11)	3	犬山祭	犬山市	・白浪五人男 (稲瀬川勢揃いの場)
	5	東美濃ふれあい座	中津川市	・義経千本桜 (寿司屋の場)
	9	歌舞伎フォーラム	明治座	・創作芝居 (袈裟と盛遠) 一部・二部・三部
	10	国民文化祭福岡町 (子ども歌舞伎大会)	福岡町	・白浪五人男 (稲瀬川勢揃いの場)
	11	第27回公演 (国民文化祭・ぎふ99地歌舞伎大会) 第7回飛騨・美濃歌舞伎大会	明治座 中津川市	・元禄忠臣蔵 (南部坂雪の別れ) ・元禄忠臣蔵 (南部坂雪の別れ)
2000 (平成12)	5	東美濃ふれあい座 東濃地歌舞伎そりい踏み公演	中津川市	・義経千本桜 (寿司屋の場)
	10	第28回公演	明治座	・絵本太功記 (尼ヶ崎閑居の場) 子供歌舞伎 ・ひらがな盛衰記 (源太勘当) ・松竹梅だんまり ・菅原伝授手習鑑 (寺子屋の段)
	11	第26回東濃歌舞伎大会	中津川市	・ひらがな盛衰記 (源太勘当)
2001 (平成13)	9	第29回公演	明治座	・白浪五人男 (稲瀬川勢揃いの場) 子供衆 ・仮名手本忠臣蔵七段目 (一力茶屋の場) ・義士十二刻 (潮田又之丞) ・心中宵庚申 (八百屋の場)
		飛騨・美濃歌舞伎大会かしも2001 第27回東濃歌舞伎大会	明治座 中津川市	・義士十二刻 (潮田又之丞) ・仮名手本忠臣蔵七段目 (一力茶屋の場)
2002 (平成14)	9	30周年記念公演	明治座	・寿式三番叟 ・会稽扇曾我 (子ども衆) ・八嶋日記後日譚 ・絵本太功記 (尼ヶ崎閑居の場) ・一乃谷嫩軍記 (熊谷陣屋の場)
2003 (平成15)	9	第31回公演	明治座	・三国一曾我の礎 (由比ヶ浜の場) ・浮世柄比翼稲妻 (鞘当の場) 子ども衆 ・壘妖術滝夜叉姫 (節波山 岩屋の場) ・義経千本桜 (寿司屋の場)

第23回の公演後に、歌舞伎保存会が再編成され、会長は田口茂雄となった。
(広報加子母参照)

1997(平成9)年～1999(平成11)年まで、創作芝居「袈裟と盛遠」三部作の公演を行った。加子母の小郷地区にある文覚上人の墓には、旧暦7月9日に袈裟御前の霊が宿る白いナメクジが現れると伝えられており、その文覚上人と袈裟御前を中心とした創作歌舞伎である。

大歌舞伎のスタッフや俳優と、加子母歌舞伎保存会が共に参加した。

表 3.1-6 「袈裟と盛遠」スタッフリスト

監修	市川團十郎		
作	依田学海	川尻宝岑	竹柴其水
指導	尾上松助		
脚本	竹柴源一	岩崎良子	

(6) 6代会長 粥川眞策 (2004年4月～2007年3月)

表 3.1-7 保存会年表 (6代会長時代)

年	月	出来事	場所	演目
2004 (平成16)	4	6代会長 粥川眞策 就任		
	9	第32回公演	明治座	<ul style="list-style-type: none"> ・白浪五人男 (稲瀬川勢揃いの場) 子供衆 ・菅原伝授手習鑑 (車引の場) ・神靈矢口の渡 (頓兵衛住居の場) ・義経千本桜 (道行初音鼓吉野山) ・菅原天神記 (松王下屋敷)
2005 (平成17)	9	第33回公演	明治座	<ul style="list-style-type: none"> ・由良港千軒長者 (浜辺の場) 子供衆 ・妹背山婦女庭訓 (御殿の場) ・縁結神 (釣女) ・御所桜堀川夜討 (弁慶上使)
2006 (平成18)	3	民俗芸能公演「中津川の芝居」	国立劇場	<ul style="list-style-type: none"> ・義士十二刻 (潮田又之丞住家の場) ・伝言石井帰咲 (浜名将監館の場)
	9	第34回公演	明治座	<ul style="list-style-type: none"> ・松扇会舞踊 ・飯盛山時雨 白虎隊 (第一場) 子供歌舞伎 ・御目見得曾我対面 (工藤館の場) ・義経千本桜 (鮫屋の場)

2006 (平成18) 年には、国立劇場第103回民俗芸能公演として「東西文化の交差点・東濃に伝わる芝居—中津川の芝居」が国立劇場で行われた。加子母歌舞伎保存会の他に、「恵那文楽保存会」、「東濃歌舞伎中津川保存会」が参加した。

(7) 7代会長 中島敏明 (2007年4月～)

表 3.1-8 保存会年表 (7代会長時代)

年	月	出来事	場所	演目
2007 (平成19)	4	7代会長 中島敏明 就任		
	9	第35回公演	明治座	・寿式三番叟 ・浮世柄比翼稲妻 (仲ノ町筋当の場) 子ども歌舞伎 ・新版歌祭文 (野崎村) ・奥州安達原二段目 (文治住家) ・奥州安達原三段目 (袖萩祭文)
2008 (平成20)	9	第36回公演	明治座	・御目見得寿曾我対面 (工藤館の場) 子ども歌舞伎 ・心中宵庚申 (八百屋の場) ・道行旅路花婿 (戸塚山の場) ・恋女房染分手綱 (重の井子別れの場)
	10	NHK「新日本紀行ふたたび」に取り上げられる		
2009 (平成21)	9	第37回公演	明治座	・八嶋日記後日譚 (日向島の段) ・白浪五人男 (稲瀬川勢揃いの場) 子供歌舞伎 ・絵本太功記 (尼ヶ崎閑居の場) ・元禄忠臣蔵 (南部坂雪の別れ)
2010 (平成22)	9	第38回公演	明治座	・寿式三番叟 ・浮世柄比翼の稲妻 (仲之町筋当の場) 小学生衆 ・世迷仇横櫛 (鳥居峠・友之助住家の場) 中学生衆 ・源平魁躰 (扇屋熊谷)
2011 (平成23)	9	第39回公演	明治座	・会稽扇曾我 (鶴ヶ岡八幡対面の場) 小学生衆 ・縁結神 (釣女) ・曇妖術瀧夜叉姫 (筑波山岩屋の場) 中学生衆 ・一乃谷嫩軍記 (熊谷陣屋の場)
2012 (平成24)	9	第40回記念公演	明治座	・寿式三番叟 中学生衆 ・鬼一法眼三略巻 (一条大蔵卿) ・白浪五人男 (稲瀬川勢揃いの場) ・だんまり・お染久松浮名読売 中学生衆 ・鎌倉三代記 (絹川村閑居の場)
2013 (平成25)	9	第41回公演	明治座	・元禄花見踊 (小学生衆) ・菅原伝授手習鑑『車引』 (中学生衆) ・妹背山婦女庭訓『道行恋芋環』『三笠山御殿』 ・一乃谷嫩軍記 (熊谷陣屋の場)
		飛騨・美濃歌舞伎大会えな2013	恵那市	・一乃谷嫩軍記 (熊谷陣屋の場)
2014 (平成26)	9	第42回公演	明治座	・御目見得だんまり 歌舞伎絵巻『雪月花』 ・本朝廿四孝 (十種香) ・浮世柄比翼稲妻 (仲の町筋当場) (小学生衆) ・舞踊 (雪の連舞) ・菅原伝授手習鑑 (寺子屋の段)
2015 (平成27)	10	全国育樹祭イベント	明治座	・子供三番叟 ・縁結神 (釣女)
	11	第43回公演会	明治座	・舞踊 手習子 ・舞踊 わらべ獅子 ・寿式三番叟 ・三国一曾我礎 由比ヶ浜の場 ・御目見得曾我対面 (工藤館の場) ・絵本太功記 (尼ヶ崎閑居の場) ・縁結神 (釣女)

前会長に指名され、7代会長が就任した。

2010（平成 22）年には「東濃の地歌舞伎と芝居小屋」が「ぎふの宝もの」に認定され、岐阜自慢ジカブキプロジェクトが発足した。

また、2015（平成 27）年には大規模改修された明治座のこけら落とし公演が行われた。

3.2 歌舞伎保存会の組織

3.2.1 1995（平成7）年以前

結成当初の保存会には役者のみが所属しており、収入面は敬老会公演での御祝儀に頼る部分が大きかった。

3.2.2 1995（平成7）年～2010（平成22）年

1995（平成7）年、歌舞伎保存会が再編成され、役者の他に協力会員を募ることになった。会員は一般と法人に分かれ、一般会員は一口500円の寄付を行う。加子母の全戸に協力を呼びかけ、区長を通じて会費の徴収を依頼する。原則として会員期間は1年とする。この当時は役者部会など4つの部会があった。

(図 3.2-1)

3.2.3 2011（平成23）年以降

2011（平成23）年7月15日に歌舞伎保存会規約が改正され、4つの部会がなくなった。



図 3.2-1 歌舞伎保存会の組織

3.3 関連組織

3.3.1 団升一門

振付師を中心とし、主に東濃地方で活動する地芝居団体である。現在、振付師 1 人、着付け師 4 人、顔師 3 人、床山 1 人、太夫・三味線 1 組、下座 2 人を抱える。

東濃地方では、振付師という指導者のもとに地芝居を行う。明治時代の鑑札制度が緩んでくると、鑑札を持つ者と一緒であれば素人でも舞台に上ることが出来るようになった。このように半プロ化した者たちは振付師として指導しつつ、自らも舞台に立った。これが振付師の始まりとされている¹。

次頁に詳述する 6 代目松本団升、2 代目松本団女もそうした振付師の 1 人であり、加子母歌舞伎の復活や維持に大きく関わっている。

(1) 6代目松本団升² (1922～2007)

1946 (昭和21)年から山岡町に住み、振付を始めた。1959 (昭和34)年、伊勢湾台風によってその年の地芝居公演が行えなくなった時、他の振付師は仕事をやめたが、団升は後述する松扇会の活動で生活を支えた。そして教え子に歌舞伎の振り付けをすることで、地芝居の消滅を回避し、その復活を実現してきた。1987年には、地芝居において文部大臣から地域文化功労者賞を受賞した。

加子母歌舞伎には、第1回公演 (1973年) から第30回公演 (2002年) まで振付師として関わっていた。

(2) 2代目松本団女 (1957～)

1957 (昭和32)年、6代目松本団升の次女として生まれる。

1977 (昭和52)年から「松本松扇」の名を許され、加子母歌舞伎にもその名で第15回公演 (1987年) に舞踊振付で参加し、三味線では第23回公演 (1995年)、第25回公演 (1997年)、第26回公演 (1998年)、第28回公演 (2000年) に、下座でも第27回公演 (1999年) に参加した。

また、1990 (平成2)年に義太夫三味線方の豊澤千賀龍に師事し、1998 (平成10)年から「豊澤みゆき」の名を許された。この名前でも、加子母歌舞伎の第29回公演 (2001年) と第30回公演 (2002年) に出演している。

振付師としては、第31回公演 (2003年) から父・6代目松本団升の跡を継いでいる。

表 3.3-1 6代目松本団升、2代目松本団女経歴（松本団女襲名披露パンフレットより作成）

6代目松本団升（本名 原田光泰）

西暦	和暦	年齢	出来事
1922	大正11	0	長野県岡谷市に生まれる（8月8日）
1925	大正14	3	5代目松本団升一座の子役として初舞台以後、巡業に出る
1935	昭和10	13	上京、五反田平野呉服店へ奉公
1937	昭和12	15	舞踊、藤間松寿師に入門
1940	昭和15	18	「藤間松光」の芸名を許され、歌舞伎名「松本松之助」を名乗り、吾妻市之丈一座に加わり、巡業に出る
1944	昭和19	22	甲府で出演中、招集され、松本五十連隊へ入隊
1946	昭和21	24	復員後、市川寿美十郎一座に加わり中京巡業、実父の在所遠山村久保原（山岡町）日枝神社大祭余興、青年団に歌舞伎振付指導する。 以後、地芝居振付師の道を歩む
1949	昭和24	27	高崎志げ子と結婚、鶴岡町（山岡町）に住む
1950	昭和25	28	長男博（宙）誕生
1953	昭和28	31	長女美登里誕生
1957	昭和32	35	次女美雪誕生
1958	昭和33	36	5代目松本団升他界、「松本松之助」改め初代「松本団女」襲名
1959	昭和34	37	舞踊「松扇会」結成
1961	昭和36	39	地芝居の子役として初舞台を踏み、同時に日本舞踊を習う
1968	昭和43	46	6代目「松本団升」襲名
1973	昭和48	51	加子母歌舞伎の振付師になる
1977	昭和52	55	「松本松扇」の名を許され、舞踊「みゆき会」を結成、振付指導を開始
1978	昭和53	56	春日大社巫舞指導をはじめ（24年間）
1979	昭和54	57	安藤徳一（瑞浪市稲津町）と結婚
1980	昭和55	58	岐阜県芸術文化顕彰
1986	昭和61	64	長唄、杵屋六輪賀師に入門
1987	昭和62	65	文部大臣地域文化功労者表彰
1988	昭和63	66	長唄宗家、六世杵屋勘五郎師（現 寒玉師）より「杵屋勘輪咲」の名を許され、以後、地芝居の下座音楽を担当する
1990	平成2	68	義太夫三味線方、豊澤千賀龍師に師事
1991	平成3	69	財団法人顕彰会表彰
1995	平成7	73	山岡町名誉町民指定
1997	平成9	75	岐阜県重要無形文化財指定
1998	平成10	76	「豊澤みゆき」の名を許される 松本団升の事務局を担当し、記念公演には団升の相手役をつとめる 日本舞踊団升流松扇会の家元と成る 加子母歌舞伎に「豊澤みゆき」の名で参加
2001	平成13	79	（三味線）
2002	平成14	80	ニッセイ バックスステージ賞 加子母歌舞伎の振付師を娘の松本団女に引き継ぐ（振付師として最後の年）
2003	平成15	81	地芝居振付指導を始める
2007	平成19	85	没

2代目松本団女（本名 安藤美雪）

年齢	出来事
0	6代目松本団升の次女として、山岡町に生まれる（2月20日）
1	
2	
4	
11	
16	
20	
21	
22	
23	
29	
30	
31	
33	
34	
38	
40	
41	
44	
45	
46	
50	

(3) 松扇会

日本舞踊団升流の会である。地芝居衰退期である 1959(昭和 34)年に発足し、1985(昭和 60)年に加子母支部が設立された。他は恵那市上矢作町、明智町、山岡町、中津川市阿木、苗木、坂下に支部がある。

加子母歌舞伎公演には第 12 回(1984 年)から舞踊で参加する。師匠が同じであるため、松扇会のメンバーが歌舞伎に出演することも多い。

3.3.2 衣裳屋

(1) 安藤衣裳部³

瑞浪市内は江戸期から、買い芝居や人形浄瑠璃などが盛んに上演されてきた地域であった。安藤家は、当時の古文書に「濃州明也村の衣裳屋」として登場する。

安藤すわ子は、1946（昭和21）年ごろから仕事を手伝いはじめた。そして夫の死後に本格的に勉強をはじめ、衣裳屋となった。他地区の衣裳屋と大きく異なる点は、衣裳やかつらの貸し出しのみを生業とし、演劇集団や振り付け指導者を持たないことである。

しかし、1972（昭和46）年に区画整理のため立ち退きを余儀なくされ、衣裳の保管場所がなくなったため、全ての衣装は美濃歌舞伎博物館⁴で管理が行われるようになった。

その後すわ子は、衣裳の製作・着付けおよび床山として瑞浪市の無形文化財に指定され、1989（平成元）年に没するまで衣裳の仕事に従事した。

加子母では第2回公演（1974年）まで衣裳を借りていた。

(2) 日吉ハイランド衣裳部

美濃歌舞伎博物館が所有する江戸時代からの歌舞伎衣装4500点、かつらなど350点、小道具など300点を活用する。これらの展示物は安藤衣裳部から寄贈された物である。また、2006年には各務原の衣裳屋からも衣裳を引き取り、管理している。

加子母歌舞伎では、第3回公演（1975年）から第39回公演（2011年）まで借りていた。

(3) 松本衣裳

団升一門が所有する衣裳（新規に作製したものも含む）を管理する団体である。加子母歌舞伎では、第40回公演（2012年）から現在に至るまで、ここから衣裳やかつらを借りている。

3.3.3 東濃歌舞伎保存会

1965（昭和40）年に設立された、東濃地方の歌舞伎保存会をとりまとめる組織である。現在15団体が所属している。（表3.3-2）

1973（昭和48）年、明治座が修理された記念として第10回が開催された東濃歌舞伎大会は、東濃歌舞伎保存会が主催している。現在は、毎年12月の第2日曜日に開催されている。

また、2000（平成12）年、中津川市に現代的な歌舞伎ホールを持つ、東美濃ふれあいセンターが建設された。その年にこけら落としとして、「東濃歌舞伎揃い踏み公演（ウエルカム21ぎふ）」が行われた。これ以降、それまで3年に1回の公演だった東濃歌舞伎大会は毎年開催になった⁵。

表 3.3-2 東濃歌舞伎保存会の参加団体（2015年現在）⁶

No.	名称	場所	舞台	公演日時
1	加子母歌舞伎保存会	中津川市	明治座	9月第1日曜日
2	常盤座歌舞伎保存会	中津川市	常盤座	毎年3月最終日曜日
3	坂下歌舞伎保存会	中津川市	坂下公民館	毎年11月第2日曜日
4	蛭川歌舞伎保存会	中津川市	蛭子座	毎年10月第3日曜日
5	東濃歌舞伎中津川保存会	中津川市	東美濃ふれあいセンター	毎年3月第1日曜日
6	飯地五毛座歌舞伎保存会	恵那市	五毛座	隔年4月
7	恵那歌舞伎保存会	恵那市	恵那文化センター	毎年2月最終日曜日
8	東野歌舞伎保存会	恵那市	東野小学校体育館	毎年10月第4日曜日
9	三郷歌舞伎保存会	恵那市	宮盛座	毎年11月第1日曜日
10	安岐歌舞伎保存会	中津川市	中津川市	不定期
11	山岡歌舞伎保存会	恵那市	山岡公民館	12月第1日曜日
12	明智町歌舞伎保存会	恵那市	明智町かえでホール	5月第3日曜日～6月
13	上矢作町歌舞伎保存会	恵那市	上矢作公民館	隔年11月最終日曜日
14	串原歌舞伎保存会	恵那市	サンホールくしはら	11月第3日曜日
15	東座歌舞伎保存会	加茂郡白川町	東座	5月中旬

3.3.4 岐阜県地歌舞伎保存振興協議会

岐阜県内の27の歌舞伎保存会が加盟する団体である。(表 3.3-3、図 3.3-1)
会長は、美濃歌舞伎保存会の会長でもある小栗榮輝がつとめる。

また、岐阜県地歌舞伎保存振興協議会が主催する飛騨・美濃歌舞伎大会は、
1993(平成5)年に開始されてから、毎年行われている。

表 3.3-3 岐阜県地歌舞伎保存振興協議会の参加団体(2015年現在)

No.	名称	場所	舞台	公演日時	振付師
1	恵那歌舞伎保存会	恵那市	恵那文化センター	2月最終日曜日	中村高女
2	東濃歌舞伎中津川保存会	中津川市	東美濃ふれあいセンター	3月第1日曜日	中村高女、4代目中村津多七
3	常盤座歌舞伎保存会	中津川市	常盤座	3月最終日曜日	
4	飯地五毛座歌舞伎保存会	恵那市	五毛座	4月隔年(偶数年)	松本団女
5	垂井曳山保存会	垂井町	垂井宿周辺	5月2日~4日	
6	乙原歌舞伎保存会	揖斐川町	公正公民館	5月3日(3年に1度)	
7	鳳凰座歌舞伎保存会	下呂市	鳳凰座	5月3・4日	市川福升
8	揖斐川町子供歌舞伎保存会	揖斐川町	三輪神社	5月4・5日	
9	東座芸能保存会	加茂郡白川町	東座	5月第3日曜日	中村高女・中村津多七
10	明智町歌舞伎保存会	恵那市	明智かえでホール	5月第3日曜日~6月	松本団女
11	美濃歌舞伎保存会	瑞浪市	相生座	8月最終土曜日、10月第1金曜日	
12	加子母歌舞伎保存会	中津川市	明治座	9月第1日曜日	松本団女
13	東白川村歌舞伎保存会	東白川村	はなのき会館	9月敬老の日の前日曜日	松本団女
14	高雄歌舞伎保存会	郡上市	口明方小学校	10月第1土曜日	保存会員
15	村国座子供歌舞伎保存会	各務原市	村国座	10月第2土・日曜日	松本団女
16	蛭川歌舞伎保存会	中津川市	蛭子座	10月第3日曜日	中村高女
17	東野歌舞伎保存会	恵那市	東野小学校体育館	10月第4日曜日	中村高女
18	飛騨市河合町歌舞伎保存会	飛騨市河合町	河合町公民館	10月下旬~11月上旬	
19	白雲座歌舞伎保存会	下呂市	白雲座	11月2・3日	市川福升
20	坂下歌舞伎保存会	中津川市	坂下公民館	11月第2日曜日	松本団女
21	串原歌舞伎保存会	恵那市	サンホールくしはら	11月第3日曜日	松本団女
22	上矢作歌舞伎保存会	恵那市	上矢作公民館	11月最終日曜日	松本団女
23	佐見歌舞伎保存会	加茂郡白川町	佐見中学校体育館	11月下旬(隔年)	市川福升
24	山岡歌舞伎保存会	恵那市	山岡公民館	12月第1日曜日	松本団女
25	三郷歌舞伎保存会	恵那市	宮盛座	不定期	
26	安岐歌舞伎保存会	中津川市	中津川市	不定期	
27	付知歌舞伎同好会	中津川市	中津川市	不定期	

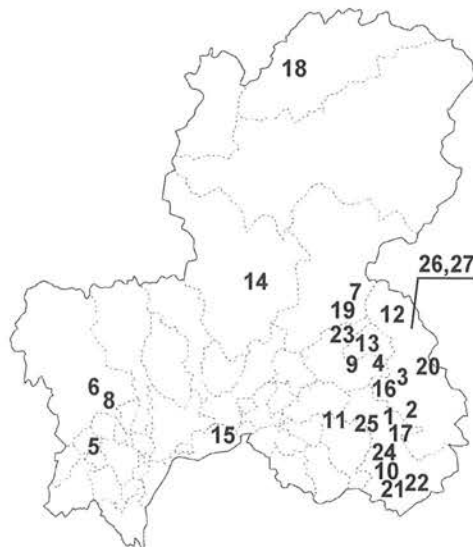


図 3.3-1 岐阜県地歌舞伎保存振興協議会参加団体の分布

3.3.5 武蔵野美術大学

空間演出デザイン学科の川口直次教授のゼミ生が、第30回公演（2002年）から大道具や照明係として協力している。川口教授が2011（平成23）年に退官した後も、OB・OGが中心となって学生を集め、例年一週間ほど加子母に滞在し、大道具を製作している。本番では道具の組立・解体、幕引きも担当する。

3.4 外部団体との関係

2005（平成17）年2月13日、加子母村は平成の大合併により中津川市に編入され、中津川市加子母となった。そして2011（平成23）年に、加子母議会では地域審議会設置条例が廃止され、「地域審議会」から現在の「むらづくり協議会」へと移行した。むらづくり協議会は10の分科会を持ち⁷、加子母歌舞伎保存会は文化分科会に属する。

3.3で述べた外部団体と、加子母の内部団体を総合し、**図3.4-1**に加子母歌舞伎に関わる組織図を示す。



図 3.4-1 加子母歌舞伎保存会と外部団体の関係図

3.5 歌舞伎の構成員

歌舞伎の上演には、役者だけではなく裏方や下座などのスタッフが必要となる。以下に、舞台上の役職と、準備段階の役職に分けて詳述する。

3.5.1 舞台上の役職

(1) 太夫

義太夫節（江戸時代前期に竹本義太夫が始めた浄瑠璃の一種）に乗せて、浄瑠璃三味線とともに場面の状況や登場人物の心境などを語る、ナレーションである。

(2) 三味線

三味線は、太棹の浄瑠璃三味線を使う。

加子母歌舞伎に太夫・三味線として参加している竹本美功と豊澤順八は、下呂市の鳳凰座歌舞伎保存会の一員であるが、他の保存会の公演にも参加している。

(3) 下座（囃子方・下方）

完全な裏方として太夫と三味線の背後、御簾の後ろにいて、三味線と鐘・太鼓のお囃子を担当する。

三味線は囃子三味線・新内三味線（普通の棹）を使う。

(4) 黒子

黒い衣装に身を包み、顔を隠して舞台に上って、小道具を役者に渡したり、舞台裏に下げたりする。また、地芝居では役者が台詞を忘れた際、台詞を教えることもある。

加子母では、その外題で役を演じない人が担当する。

3.5.2 準備段階の役職

(1) 振付師

準備段階では練習を指導し、本番では拍子木を打って舞台を盛り上げる。

(2) 着付師

所蔵する衣裳を選別し、役者の役や背格好に合わせて着付ける。

(3) 床山

かつらを役と役者に合わせ、結い直す。かつらの保管も行う。

(4) 顔師

役者の演じる役に合わせて、化粧（隈取）をする。

(5) 大道具係（道具方）

背景だけでなく、本番の道具の組立・解体、幕引き、回り舞台も担当する。
照明や音響係も含む。

3.6 歌舞伎の運営方法

調査によって明らかになった、毎年の加子母歌舞伎公演の大まかなスケジュールを表 3.6-1 に示す。

表 3.6-1 加子母歌舞伎のスケジュール

時期	出来事	説明
12月もしくは2月ごろ	挨拶	振付師に一年のお礼と、「来年もよろしくお願いします」という挨拶をする
3～6月	台本選定	振付師にその年参加するメンバーを伝え、台本を決定する
6月末～8月	練習	振付師を呼ぶ練習が約15回、自主練習が10回程度である
本番前日	三味合わせ	リハーサルとして、この日に初めて三味線と合わせて練習を行う
9月第1日曜日	公演	通常はこの日に公演をする

3.7 第3章註

1. 『地方芝居・地芝居研究』 218.
2. 『美濃の地歌舞伎』 30-38 より作成
3. 小栗幸江（編）『ぎふ地歌舞伎衣裳』（岐阜新聞社, 2015） 118-119.
4. 美濃歌舞伎博物館は、舞台部分に明智町の常盤座を、客席部分に下呂町の相生座を移築復元した芝居小屋を持つ、博物館施設である。
5. http://www.jikabuki.com/learning_jikabuki/kikou/yoshida/
6. 丸山幸太郎「美濃・飛騨における地芝居保存会の系譜 1」『岐阜女子大学地域文化研究 25』（岐阜女子大学地域文化研究所, 2008） 13-28 より作成
7. 加子母むらづくり協議会には、防災安全、社会福祉、住環境、教育、文化、スポーツ、農業、林業、商工業、地域づくり、の 10 分科会が所属している。

第4章 歌舞伎関係者の意識調査

本章では、聞き取り調査の目的と方法を示す。その後、調査結果をまとめ、考察をする。

4.1 調査の目的

加子母歌舞伎が40年以上続いてきた理由と、人々が歌舞伎と関わる動機、そして歌舞伎と明治座との関連性を明らかにするため、聞き取り調査を行う。

4.2 調査の方法

4.2.1 調査概要

- 調査期間** : 2015年10月16日～12月18日
- 回答者** : 加子母歌舞伎に関係する人物、計15名
- 調査方法** : 聞き取り調査表を被験者に配布し、それに基づいて対話形式による聞き取り調査を行った。調査表本文は資料編を参照。
- 調査内容** : 加子母歌舞伎の魅力ややりがい、そしてそれらがどう明治座とつながっているのかを、聞き取り調査によって尋ねる。調査項目を次頁に示す。

4.2.2 調査項目

(1) 基本属性、(2) 歌舞伎に関する質問、(3) 明治座に関する質問、の3カテゴリ計12項目を質問した。(表 4.2-1)

(1) 基本属性、(2) の⑤～⑥までは全員に、そして⑦は調査時に歌舞伎との関わりを休止していた人物に対して尋ねた。⑧～⑪は④において「歌舞伎役者」と回答した人物のみを対象とし、(3) は再び全員に質問した。

表 4.2-1 調査項目一覧

カテゴリ	No.	質問項目
(1) 基本属性	①	性別
	②	年齢
	③	出生地
	④	歌舞伎との関わり方
(2) 歌舞伎に関する質問 ※⑧～⑪は歌舞伎役者のみに質問	⑤	いつから関わっているのか
	⑥	関わるきっかけ(複数回答)
	⑦	休止理由(引退・休止中の人物のみ)
	⑧	何故歌舞伎を続けてきたのか
	⑨	歌舞伎の魅力
	⑩	演じた時に手応えがあった役と、その理由
	⑪	歌舞伎と生活の関わり
(3) 明治座に関する質問	⑫	明治座と他の舞台の違い(複数回答)

4.3 調査結果

4.3.1 基本属性

被験者の基本属性を表 4.3-1 に示す。

表 4.3-1 基本属性の回答

①性別	性別	回答数	③出生地	場所	回答数
	男	8		加子母内	9
女	7	(内訳) 小郷	1		
②年齢	年代	回答数	小和知	1	
	20代	2	二渡	0	
	30代	1	番田	1	
	40代	2	中切	3	
	50代	3	上桑原	0	
	60代	3	中桑原	0	
	70代	2	下桑原	1	
	80代	2	万賀	2	
			角領	0	
			加子母外	6	
④関わり方			役柄	回答数	
			歌舞伎役者	10	
			歌舞伎保存会	1	
			大道具係	3	
		振付師	1		

加子母外の出身者は、県の移住事業¹によって村に来たIターン者と、外部組織に所属する人物である。④で歌舞伎役者と回答した10名に(2)の⑧～⑪を質問した。

4.3.2 歌舞伎に関する質問

⑤いつから関わっているのか

集計結果を、加子母歌舞伎の公演時期によって4つに分類した。(表 4.3-2)

主な出来事として、第1回～第10回公演では、第6回公演で子供歌舞伎が開始した。第11回～第20回公演では、第12回公演の年に加子母松扇会が発足した。第21回～第30回公演では第23回公演の年から森の交流大使事業が始まり、第30回公演から武蔵野美術大学が関わりはじめた。第31回公演以降には、第33回公演の年に中津川市との合併があった。

表 4.3-2 ⑤いつから関わっているのか (公演時期別)

分類	回答数
第1回～第10回公演 (1973～1982年)	6
第11回～第20回公演 (1983～1992年)	2
第21回～第30回公演 (1993～2002年)	3
第31回公演～ (2003年～)	4

第1回～第10回公演のごく初期から参加し、以降20回以上歌舞伎に出演している人物も多かった。

⑥関わるきっかけ

複数回答として集計した。結果を以下の表 4.3-3 に示す。

表 4.3-3 ⑥関わるきっかけ（複数回答）

分類	回答数
芝居が好きだったから	3
誰かに誘われたから	6
（内訳） 役者の友人・知人	4
役場職員	2
家族が熱心だったから	3
松扇会	1
記念公演	2
武蔵野美術大学	2

「芝居が好きだったから」という積極的理由が見られた。回答者は、歌舞伎復活以前から青年団演劇や居住地区の祭りの芝居に出演しており、自然に歌舞伎へ情熱が移った場合が多かった。この3名は、いずれも初期から参加し、以降30回近く歌舞伎に出演している。

最も回答が多かったきっかけは「誰かに誘われたから」であった。役者の友人から誘われることが多く、Iターン者の場合は当時の村役場の職員から誘われている。さらに、2名は家族が熱心に歌舞伎に取り組んでいたため、自然に関わりはじめた。

また、1名が松扇会入会を、2名が記念公演の際の特別出演をきっかけとしていた。また、武蔵野美術大学のゼミの授業で加子母に関わりはじめた人物は2名だった。

⑦休止理由

歌舞伎をやめたり、休止したりしている人物が4名いたため、その理由を尋ねた。(表 4.3-4)

表 4.3-4 ⑦休止理由

分類	回答数
年齢的理由による引退	3
家庭の事情(出産など)	1

年齢的な理由で引退した人物が多かった。また、仕事や生活が忙しいために一時的に休止していた人物が復帰するケースも見受けられた。

⑧何故歌舞伎を続けてきたのか

以下に集計結果を示す。(表 4.3-5)

表 4.3-5 ⑧何故歌舞伎を続けてきたのか

分類		回答数
積極的	芝居が好きだから	3
	参加すると得になることがあったから	1
消極的	自然に・なんとなく	3
	やめづらい	3

積極的理由として、「芝居が好きだから」「参加すると得になることがあったから」が挙げられた。

一方で、消極的理由として「責任を感じるため、やめづらい」「自然に、なんとなく続けている」という意見も多かった。一度歌舞伎に参加すると、断らないかぎり翌年も配役されるシステムであるため、「自然に、なんとなく」歌舞伎を続けたが、徐々に芝居に熱が入る場合もあった。

⑨歌舞伎の魅力

- ・ 演じること自体が楽しい、役にのめりこむ
- ・ 変身できる、別世界に行ける
- ・ 歌舞伎でしか得られないつながりがある
- ・ ドーランの匂いが好き
- ・ うまくなるほど、次に同じ役を演じる時、もっとうまくやらなければならないという難しさがある
- ・ お客さんや裏方、プロの人から反応があった時に嬉しい

上記のように、様々な回答が挙げられた。役者たちは、他の娯楽では体験できないことに魅力を感じていることが分かった。

⑩演じた時に手応えがあった役と、その理由

⑨と関連して、役者の歌舞伎への思いを把握するために質問した。それぞれの役を挙げた理由としては、下記が挙げられた。

- ・ うまく出来た、評価が高かった
- ・ 難しい
- ・ うまく演じられず、残念だった
- ・ 何度も演じた役だった

振付師は役者の個性を考えて配役しており、女形や三枚目の役など、人によってよく割り振られる役割があるため、何度も同じ役を演じることがある。よって、一つの役が強く印象に残り、また「前よりもうまく演じなければならない」という気持ちが「難しかった」という回答につながっている。

⑪歌舞伎と生活との関わり

歌舞伎は生活の合間に練習するものである。よって、仕事との両立や、練習外での歌舞伎との関わりについて質問した。

- ・ベテランの役者で家に集まって歌舞伎の話をする
- ・仕事や家事のカバーは仲間や家族がする
- ・練習時間外に台詞を覚えるための自主練習をする

上記のような意見が挙げられた。特に、仕事や家事を身近な人物に手伝ってもらっているという回答が多かった。

4.3.3 明治座に関する質問

⑫明治座と他の舞台の違い

昭和や平成に作られた新しいホールと、築120年以上の農村舞台明治座との違いを探るため、質問した。結果は複数回答として集計した。(表 4.3-6)

表 4.3-6 ⑫明治座と他の舞台の違い (複数回答)

分類		回答数
演じることに関しては変わらない		2
明治座には良さがある	明治座はホームグラウンド	3
	先人たちが守ってきた場所	3
	役者と観客の一体感を味わえる	3
	空間やしつらえがいい	2
明治座は芝居小屋として建てられたので、歌舞伎が必要である		4

「芝居小屋として建てられた明治座には歌舞伎が必要である」という意見は、保存会の役職を持つ人物に多く見られ、現在加子母歌舞伎を支える人々の共通認識であると考えられる。また、明治座にホームグラウンドのような親しさを感じたり、先人たちの守ってきた場所として強く意識したりと、「明治座には独特の良さがある」という意見が多かった。

4.4 小結

聞き取り調査を行うことによって、加子母歌舞伎に関わる人々が魅力的に感じているものを具体的に把握することができた。それは、歌舞伎自体もしくは芝居小屋である明治座である。当初あまり熱心ではなかったが、歌舞伎を続けるうちに熱が入る場合も確認できた。また、「歌舞伎をやめたい」と思っている人物も、歌舞伎だけではなく別の形（明治座保護会など）で守っていききたいという意見も見られた。

調査の結果、加子母歌舞伎に関わる人々を、【人に依存する場合】【歌舞伎に依存する場合】【明治座に依存する場合】の3つの類型に分類した。（図 4.4-1）



図 4.4-1 歌舞伎関係者の3類型

【人に依存する場合】

身近に歌舞伎関係者がおり、その人物に影響される形で歌舞伎をはじめた。その後、芝居に熱を入れて取り組むか、もしくは特段やめる理由がないため、毎年続けている。その結果、明治座をホームグラウンドと認識するようになった。

【歌舞伎に依存する場合】

歌舞伎自体に魅力を感じている。大勢の人々の前に立って演じることが重要なため、舞台によって心持ちが変わることはない。該当する人物は、かつての青年団演劇から熱が移った場合が多かった。

【明治座に依存する場合】

明治座という芝居小屋で歌舞伎を演じること自体に興味があり、明治座を先代が残した財産として強く意識している。「加子母の人が演じる歌舞伎と地域の芝居小屋である明治座は、切っても切り離せない関係である」という根底の意識があった。これは主に、加子母歌舞伎に対して責任ある立場の人物が回答した。

4.5 第4章註

1. 「森の交流大使」岐阜県が1995年から1999年まで行った。任期は2年で、都会の若い女性を募り、山村での生活を体験してもらうもの。加子母では1人が定住している。

「山村芸術工房」岐阜県が、地元の間伐材を使い、フォレストタウン事業で平成9年度（1期）に2棟の工房を建設した。平成11年度（2期）には2棟を健康住宅として建設した。1期は彫刻・現代アートの2家族4人が平成10年4月に入居した。2期は平成12年4月から始まり、作曲と陶芸の女性2人が入居した。

第5章 結論

5.1 総括

加子母で40年以上続いてきた歌舞伎は、人々の芝居への思いと明治座への思いによって維持されており、明治座と歌舞伎は切っても切り離せない関係にあることが分かった。

明治座が岐阜県の文化財に指定される以前、青年団活動や映画上映が明治座の活用コンテンツを担っていた。しかし、歌舞伎保存会が立ち上がってから、「明治座は芝居小屋なので歌舞伎が必要である」という共通認識が立ち上がり、これが明治座の常時開館や改修工事にもつながったと考えられる。

しかし、実際は歌舞伎への関心が薄い地域住民も多くいる。今後は、この調査によって明らかになった歌舞伎上演の実態やノウハウを地域の内外に周知させることによって、より広い範囲で共通認識を育てていくことが、明治座と歌舞伎を継承していく動機を生み、ひいてはそれが地域の活性化に結びつくことを確認された。

5.2 今後の課題と展望

本論文では、現在までの加子母歌舞伎の活動をまとめ、歌舞伎に関わる人々の思いを明らかにすることができた。

今後は、この論文にまとめた歌舞伎保存会の活動内容と明治座年表の認知度を高め、地域内において歌舞伎のバックアップの体制を整えると同時に、地域外に向けて貴重な文化を紹介し、交流人口を増やすことで、加子母歌舞伎と明治座の存続を図りたい。

謝辭

謝辞

本研究を進めるにあたり、9月頃までテーマが定まらず、鬱憤ばかりためていた私に道を示してくださった藤岡先生に、心から感謝いたします。先生のおかげで、修論のモチベーションを高く保つことができ、すんなり締め切りに間に合わせることができました。

また、団升一門の団女先生にはご迷惑をお掛けしました。忙しいとわかりきっているのに押しかけて、案の定松扇会の練習に響くほど聞き取り調査が長引いてしまいました。それでも、長く時間をとって丁寧に質問に答えてくださって、本当にありがとうございました。何か失礼なことはないかとビクビクしながら聞き取りしていましたが、優しい声に心が和みました。仕事の都合がつけば歌舞伎にも参加してみたいのですが、果たして……。

そして、調査に協力してくださった加子母歌舞伎の皆さん。挙動不審な私にも優しく対応してくださって、本当にありがとうございました。加子母に行く度に「受け入れられている」と感じ、楽しく調査をすることが出来ました。それに、たくさんごちそうにもなりました。本間さんのカレーも孝美さんの味ご飯も亮子さんの焼き芋も、今でも味が思い出せるくらい美味しかったです。就職してからもちょくちょく加子母には遊びに行きます！

内木哲郎さんや田口幸子さん、伊藤満広さんをはじめとする加子母総合事務所の方には、お忙しい中ご迷惑をお掛けしました。暗い部屋でパンフレットを撮影している時、お掃除の方にまでいろいろと世話を焼いていただきました。論文の内容が少しでもお役に立てば幸いです。

一緒に加子母関連で研究に取り組んだ佐野くん、日高さん、矢野ちゃんもありがとう。同輩にも後輩にもとにかく偉そうなことばかり言ってましたが、素直に聞いてくれて嬉しかったです。特に、佐野くんには何度も家に泊めてもらいました。夜中に修論の話をするのは結構楽しかったです。日高さんには私のテーマが決まるのが遅かったせいで迷惑をかけました。研究の途中、かなりわがままも言いました。あまり根に持たないでくれると助かります……。

M2のみなさんも三年間ありがとう。もはやペースメーカーにすらなれなくてすみません。そして、卒論の時に謝辞に書き忘れていてごめんなさい……。

武蔵野美術大学のお二人にも、お世話になりました。カイロを分けてもらったり車に乗せてもらったり……突然のインタビューにも応じてくださって感謝しています。佐野くんの家に一緒に泊まることになったのはたまたまでしたが、あの数日間はとても楽しかったです。またぜひ来年お会いしたいです！

最後に。修論の進捗状況を偉そうに自慢する私にも耐えて、長話を聞いてくれた家族に、感謝します。来年からは私も稼いで、もっと楽しませます。

今回、再び論文を書いて、二年前よりも遥かに自分が成長したことを知りました。それは、卒論に真剣に取り組めて、後輩の指導にもあたることができる環境があったからこそその変化だと思います。おかげで今回の論文では楽しみを見つけられました。藤岡研究室に入って本当に良かったと思います。

みなさん、ありがとうございました。これからもよろしくお願いします。

2016年2月1日

藏野 洋美

参考文献

参考文献一覧

- 池上惇, 端信行, 福原義春, 堀田力『文化政策入門—文化の風が社会を変える』
(丸善, 2001)
- 大崎紀夫『農村歌舞伎』(朝文社, 1995)
- 小栗克介(編)『美濃の地歌舞伎』(岐阜新聞社, 1999)
- 小栗幸江(編)『ぎふ地歌舞伎衣裳』(岐阜新聞社, 2015)
- 景山正隆『愛すべき小屋—村芝居と舞台の民俗誌』(冬樹社, 1990)
- 加子母村誌編纂委員会『加子母村誌』(加子母村, 1972)
- 加子母村教育委員会(編)『加子母の農村舞台—明治座の建築と沿革』(加子母
村教育委員会, 1993)
- _____.『歴史の道』(加子母村教育委員会, 1980)
- 角田一郎(編)『農村舞台の総合的研究—歌舞伎・人形芝居を中心に—』(桜楓
社, 1971)
- _____.『農村舞台探訪』(和泉書院, 1994)
- 岐阜県教育委員会(編)『岐阜県の農村舞台—昭和46年度岐阜県農村舞台緊急
調査報告』(岐阜県教育委員会, 1972)
- _____.『歴史の道調査報告書 第五集』(岐阜県郷土資料研究協議会,
1993)
- 郡司正勝『かぶき入門』(岩波書店, 2006)
- _____.『地芝居と民俗』(岩崎美術社, 1971)
- 後藤和子「地域社会における経済発展と文化形成—明治初期の岐阜県東濃地方
の劇場型農村舞台を素材として」『経済論叢別冊地域と研究11』(京
都大学, 1996) 5-18
- 社団法人日本俳優協会(編)『歌舞伎の舞台技術と技術者たち』(八木書店,
2000)

総合観光学会（編）『観光まちづくりと地域資源活用』（同文館出版, 2010）

館野太郎「地芝居の現在とその課題」『筑波大学地域研究 34』（筑波大学大学院地域研究研究科, 2008）181-202

中京大学郷土研究会（編）『加子母村の民俗』（中京大学民俗学研究会, 1997）

豊田市郷土資料館『歌舞伎の衣裳と文化－地域に息づく農村歌舞伎』（豊田市教育委員会, 2011）

古井戸秀夫『歌舞伎入門』（岩波書店, 2002）

松尾一『飛騨街道紀行』（まつお出版, 2003）

守屋毅『村芝居－近世文化史の裾野から』（平凡社, 1988）

安田徳子『地方芝居・地芝居研究－名古屋とその周辺』（おうふう, 2009）

和角仁, 樋口和宏『歌舞伎入門事典』（雄山閣出版, 1994）